

十津川警部 雪と戦う

新装版

西村京太郎

Kyotaro Nishimura

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目次

第一章	旧天城トンネル	7
第二章	越後湯沢	38
第三章	雪の戦場へ	68
第四章	コントロール・ルーム	99
第五章	脱出	129
第六章	更に北へ	160
第七章	一つの結末	190

十津川警部 雪と戦う

第一章 旧天城トンネル

1

伊豆箱根鉄道の修善寺駅しゅぜんじから、バスで、約四十分乗ると、天城峠あまぎに着く。

小説「伊豆の踊子」で有名な天城トンネルのある場所である。

現在は、峠の下に、新天城トンネルが出来て、観光バスも、自家用車も、そちらの道を走る。

現在、あまり使用されていない旧天城トンネ

ルを、わざわざ、見に来る観光客は、あまりいなかった。来ても、ほとんどは、ハイカーで、この古びたトンネルを見に来るためにだけ、わざわざ車をとめて、旧街道を歩く人は、いなかった。

十一月に入り、温暖で知られる伊豆も、山間やまあいは、寒くなってきた、旧天城トンネルを見に来る観光客は、一層、少なくなってくる。

十一月五日の午後三時半頃、人の気配のない旧天城トンネルで、突然、爆発が、起きた。

レンガ積み of トンネル入口から、閃光せんこうと、爆発音が走り、がらがらと、崩れ出した。それと合せて、もうもうと、土煙りが噴き出した。

この爆発を目撃していたのは、東京から、観光に来ていた二人の女子大生だった。

二人は、伊豆の紅葉を求めて、バスを途中で

降りて、旧街道を歩いて来て、このトンネルをくぐり抜けるつもりだったのである。

五十メートルほど、手前まで歩いて来たとき、突然、ドーンという音と共に、地面が揺れ、トンネルが崩れて、土煙りがあがるのを見た。

二人は、驚いて、引き返し、峠下の通りに出て、この異変を知らせた。

所轄の大仁警察署から、パトカーが、駆けつけたのは、二十七分後である。

パトカーから、降りた二人の警官は、最初、旧天城トンネルが、老朽化したため、天井部分が、崩れ落ちたと、考えていたらしかった。

しかし、二人の女子大生の話を聞いている中に、トンネル内で、何か爆発があったらしいと思ふようになった。

閃光を見、爆発音を聞いたと、彼女たちが、

証言したからである。実際に、トンネルに来てみると、こちら側の入口から五、六メートルほどのところで、天井が崩れ落ち、土砂と、レンガが、トンネルを塞いでしまっていた。

それに、硝煙の匂いがした。

警官は、取りあえず、トンネルの入口に、「危険通行止」の立札を立てたあと、車の無線電話で、状況を報告した。ただの事故ではなく、爆破されたらしいと、意見も、そえてである。

静岡県警では、その報告を重視して、二人の女子大生を、大仁警察署に呼んで、詳しく、話を聞くことになった。

彼女たちの名前は、上条ゆき、森田みどりで、同じS大国文科の三年生だった。二人は、昨日、修善寺温泉に一泊し、今日は、ハイキングコースを歩いて、河津へ出る予定だったと、いった。

「閃光を見たそうだね？」

と、三浦という警部が、二人に、きいた。

上条ゆきが、

「あのトンネルって、暗いでしょう。その穴の奥の方から、どういったらいいのかな。稲光りみたいなものが走ったのよ」

「その直後に、ドーンという爆発音がした？」

「ええ。あとは、トンネルの中が崩れて、土煙りがあがつて」

「地面も揺れたわ」

と、森田みどりが、いった。

「多分、トンネルの中で、爆発物が、破裂したんだらうね」

「じゃあ、誰かが、そんなことをしたっていうの？」

と、ゆきが、眼をむいて、三浦を見た。

「多分、そうでしょうね」

「でも、誰が、そんなバカなことをするのかしら？ 今、実際に使われているのは、峠の下のトンネルの方でしょう？ そっちを爆破するのなら、わかるけど」

と、みどりが、首をかしげた。

「犯人の動機は、まだ、われわれにも、わかりませんがね。とにかく、人為的な力で、旧天城トンネルが、崩されたことは、間違いないんです。それで、あなた方に、聞きたいんだが、お二人の前に、あの旧道を、河津の方へ歩いて行った人は、見ませんでしたか？」

と、三浦警部が、きいた。

「どうだったかなア」
二人の女子大生は、顔を見合せて、考えている。

「あなた方は、確か、修善寺から、バスで、天城峠へ、やって来たんでしたね？」

「ええ」

「バスを降りてからは？」

「旧街道に入って、天城トンネルを抜けて、河津へ出るつもりだったわ」

と、みどりが、いった。

「一緒に、バスから降りた人は、いましたか？」

「いえ。あたしたち二人だけだったわ」

「すると、犯人は、バスで、行っただけじゃないんだな」

と、三浦は、^{つぶや}呟いてから、

「あの旧街道の途中でもいいし、トンネルが、崩れたあとでもいいんだが、誰か、見なかったかな？ 男か女か、子供でも——」

と、二人に、きいた。

ゆきは、あっさり、「見なかったわ」と、いったが、みどりの方は、

「見たわ」

と、違うことを、いった。

「あんた、何か見たの？」

と、ゆきが、びっくりした顔で、きいている。

「ええ。あんたが、立ち止って、峠の下の方を写真に撮ってたときよ」

と、みどりが、いう。

三浦は、彼女に向って、

「詳しく、話してくれませんか？」

「トンネルの入口近くに、トイレがあるんです」

と、みどりは、改まった口調で、いった。

「ああ、ありますね」

「そこから、男の人が、飛び出して来て、トン

ネルに、駆け込んで行つたの」

と、みどりは、いった。

「そのあとで、爆発があつて、トンネルが、崩れたんですね？」

「ええ」

「その男が、トンネルに入ってから、爆発があるまで、どのくらいの時間がありました？」

と、三浦は、きいた。

「あたしは、ゆきが、写真を撮るのを待つて、それから、トンネルに向つて、歩き出したんだから、七、八分は、あつたと思うわ」

と、みどりは、いった。

旧天城トンネルは、確か、歩いて通り抜けるのに、三分から四分かかる筈である。^{はず}とすると、その男は、爆発があつた時、反対側に、通り抜けている筈である。

「どんな男でした？ 詳しく、話して下さい」

と、三浦は、いった。

「どんなといつても、かなり離れていたし、トンネルに駆け込む後姿を見ただけだから」

「背の高い男でしたか？」

「一七〇センチくらいじゃないかな」

「服装は？」

「赤っぽいハーフコートを着ていたみたいだったわ」

「他には？」

「そのくらいしか覚えてないわ。年齢？ そうね。三十歳くらいだったかな」

「手に何か持っていましたか？」

「どうだったかなあ。何も、持ってなかったと思うけど」

と、みどりは、いった。

「その男は、トンネルに駆け込んで行つたといいましたね？」

「ええ」

「歩いて入つて行つたのではなく、走つて行つたんですね？」

「ええ」

「あわてた感じだった？」

「と、思うんだけど。普通、トンネルを抜けるのに、走つてなんか行かないでしょう？」

「そうですね」

と、三浦は、^{うなず}肯いた。

（その男が、トンネルを、爆破したのだろうか？）

トンネルに飛び込んでから、爆発物を仕掛けたのではあるまい。それでは、自分も、死んでしまふだろう。

とすれば、爆発物を仕掛けておいてから、トンネル入口近くのトイレに入っていた。

そこへ、女子大生二人が、やって来るのが見えたので、あわてて、トンネルに駆け込み、制限装置のスイッチを入れて、反対側に、通り抜けた。何分後かにしておけば、自分も、女子大生も、傷つかずにすむと、考えたのかも知れない。

（とすると、犯人は、純粹に、あのトンネルを、爆破することだけが目的で、人を傷つけることは考えてなかったということになるのだが——）

と、三浦は、考えた。

2

静岡県警では、建設局土木課の協力を得て、

爆破された旧天城トンネルの状況を、調べることになった。

トンネルの両側から、調査が、行われた。修善寺側から、五、六メートルのところに、爆発物が仕掛けられたらしく、その部分は、完全に塞がってしまった。崩れた土砂の量は、大型ダンプ五十台分くらいと、目算された。

現在、あまり使用されていないトンネルだが、それでも、天城峠は、小説の影響で、名所になっている場所である。

そこで、県が、修理に当ることになった。

県警では、犯人を、見つけて、逮捕しなければならぬ。

今のところ、わかっているのは、女子大生の森田みどりが、目撃したという男のことだけである。

三十歳くらい。身長は一七〇センチくらいで、赤っぽいハーフコートを着ていた。それだけなのだ。

わからないのは、動機だった。犯人は、なぜ、旧天城トンネルを、爆破したのだろうか？

いわゆる劇場型犯罪とは、思えなかった。

それなら、もっと、交通量の多い、有名なトンネルを狙うだろう。その方が、マスコミの取り上げ方も大きいし、被害者が沢山たくさん出れば、テレビ局だって、駆けつけるに違いないからである。

もし、犯人が、愉快犯なら、間違いない、そちらのトンネルを、選ぶ筈である。

旧天城トンネルは、確かに、有名ではある。が、観光客が訪れる程度のトンネルである。

爆破しても、実害はないのだ。

それなのに、なぜ、犯人は、爆破したのだらうか？

そこが、県警にも、三浦警部にも、わからなかった。

その日の夜、大仁警察署で開かれた捜査会議でも、その点が、問題になり、議論が百出した。一番多かった意見は、犯人が、自分の作った爆発物の威力を試そうとしたのではないかというものだった。

それなら、あまり使われなくなった旧天城トンネルを選んだことが、納得できるからである。次に多かったのは、天城に、何か恨みがあつたのではないかという意見だった。旧天城トンネルは、犯人にとって、象徴的な意味を持っていたので、犯人は、トンネルを、爆破して見せたというのだ。

他にも、いろいろと、意見があった。

例えば、旧天城トンネル内に、何か財宝が隠されていると信じた人間が、爆破して、それを取り出そうとしたのではないか、といった意見まで出た。

心中説も出た。

文学好きの男女が、天城峠を歩いた末に、結ばれた。伊豆の踊子のトンネルの恋というわけである。

ところが、そのあと、女が、心変りした。怒り、絶望した男は、自分たちの思い出のトンネルで、彼女ともども、自殺を図ったのではないか。トンネルの中で、トンネルと一緒に、死んでしまったのではないか。

もし、この推理が当たっていれば、崩壊した土砂と、レンガの下に、男女の死体が、埋ってい

ることになる。

小型のパワーシャベルカー二台が、投入されて、トンネルの修復が、始った。

しかし、これが、なかなか、はかどらなかつた。もともと、古いトンネルだった。そこへ、爆発があつたので、崩れた土砂やレンガを取り除こうとすると、天井や、側壁が、また、崩れてくるからだつた。

途中で、いつそのこと、旧天城トンネルは、潰^{つぶ}してしまおうという考えが、生れてきた。

それを聞きつけて、反対運動が起こり、更^{さら}に、人手が増やされて、側壁や、天井を、補強しながらの、崩れた土砂、レンガの取り除き作業が行われた。

三週間かかって、やっと、崩れた土砂、レンガの除去が、終了した。

死体は、なかった。心中ではないかという推理は、この時点で、消えたのである。

そして、運び出された土砂とレンガの中から、爆発物の破片が、発見された。

時限装置に使われたと思われる時計の破片でもある。

県警は、その結果について、十一月二十九日に、発表した。

それによると、使用された爆発物は、ダイナマイトで、その量は、五本から、七本と思われるというものだった。

だが、犯人は、依然^{いぜん}として、わからないままだった。

3

東京でも、この事件は、話題になった。やは

り、「伊豆の踊子」の舞台になったトンネルが、爆破されたためだった。

警視庁捜査一課の十津川^{とっがわ}も、川端康成の小説が好きだっただけに、この事件には、興味を持った。

彼の疑問は、誰が、何のために、旧天城トンネルを、爆破したのかということだった。

彼の部下も、同じ疑問を持ったらしく、事件がない時に、

「犯人は、男のようですが、動機がわかりませんね」

と、十津川に、いったりした。

「動機がわからないと、犯人の特定も難しくくて、静岡県警も、苦労しているらしいよ」

と、十津川も、いった。

十二月一日の午後、都内の世田谷のマンシ

ョンで、殺人事件が、発生した。

殺されたのは、若い女だという報告を受けて、十津川は、亀井たちを連れて、現場に、急行した。

バス停の近くの七階建のマンションだった。その506号室だった。

1Kの部屋は、若い女のものらしく、華やかに、飾られていて、その六畳の部屋の中央で、女は、セーター姿で、うつ伏せに倒れていた。

背中を刺され、白いセーターと、花模様のじゆうたんに、流れた血が、赤いしみを作っている。

「被害者の名前は？」

と、十津川は、死体を見下して、きいた。

西本刑事が、運転免許証を見つけ出して、「これによると、被害者は、森田みどり、二十

「一歳ですね」

と、十津川に、いった。

「森田みどり？ どこかで、聞いた名前だな」

「確か、旧天城トンネルの爆破の目撃者と同じ名前ですわ」

と、北条早苗^{ほうちょうさなえ}刑事事が、いった。

「そうだ。目撃者が二人いて、その一人の名前だ」

と、十津川は、肯いた。

「同一人物かどうか、調べてみましょう。確か、目撃者は、二人とも、大学生ということですから」

と、日下^{くさか}が、いった。

刑事たちは、机の引出しや、洋ダンスの引出しなどを調べていたが、日下が、学生証を見つけた。

「間違いありません。S 大國文科の三年生です。同一人物と見ていいと、思いますね」

と、日下は、その学生証を、十津川に見せた。

「犯人を見たのは、一人だったね」

と、十津川は、新聞記事を思い出しながら、いった。

「確か、ここに死んでいる、森田みどりの方だと思えますわ」

と、早苗が、いった。

「そうだ。思い出したよ。もう一人は、上条ゆきという名前で、同じ大学の仲間だったんだ」
と、十津川は、いった。

「そのために、殺されたんですかね？」

亀井が、自分でも、自信がないらしく、小声で、いった。

「それは、どうかな。静岡県警の発表では、犯

人と思われる男の後姿しか、見ていない筈だからね。それに、今まで、殺されなかったんだ。

犯人が、目撃者を消すのなら、あの事件の直後に、消しているんじゃないかな」

と、十津川は、いった。

「その後、彼女が、何か、大事なことを、思い出したのかも知れませんかよ」

と、亀井が、いう。

「旧天城トンネルの爆破は、どんな罪になるのかね？」

十津川は、部屋の天井を見上げるようにして、いった。

「建造物破壊の罪というやつでしょうね。人命は、失われていませんし、あのトンネルは、現在、あまり使用されていないものですからね。そんなに重い罪には、ならないんじゃないませ

んか」

と、亀井が、いった。

「だろうね。あのトンネルは、有名ではあるが、別に、重要文化財でもないしね」

「そうです」

「それでは、口封じにこの女子大生を殺して、殺人罪を背負うのは、割の合わない話だね」

「そうです。ただ、犯罪は、計算して、行こうというものでもありませんが——」

と、亀井は、いった。

確かに、亀井のいう通りだと、十津川も思っている。

微罪を隠すために、殺人を犯す人間もいるのを、十津川は、知っている。その人間の置かれた社会的立場にもよるのだ。

聖職者と呼ばれる人は、万引きのような微罪

でも、社会的に、葬^{ほうむ}られてしまうだろうが、そんなことでは、びくともしない人間もいる。

それは、わかるのだが、今回の問題では、どうも、あのトンネル爆破を隠すために、殺人を、犯すとは、考えにくかった。

「とにかく、先入主を持たずに、捜査を進めてみよう」

と、十津川は、いった。

捜査本部が、成^{せいじょう}城警察署に置かれた。

死体は、司法解剖のために、大学病院に、運ばれた。

西本と、日下が、被害者の住んでいたマンションの住人や、管理人から聞き込みを、行った。十津川と、亀井は、被害者と同じS大の同級生たちから、話を聞くことにした。

その中には、一緒に伊豆へ行った上条ゆきも、

いた。

高校からの友だちだという上条ゆきは、青い顔で、十津川たちの質問に、答えてくれた。

「昨日、学校の帰りに一緒にラーメンを食べて、冬休みのアルバイトのことで、話し合ったんです」

と、ゆきは、いった。

「アルバイトの、どんなことですか？」

と、十津川は、相手の気持を考えて、努めて、優しく、丁寧^{ていねい}な口調で、質問した。

「情報の交換ですわ。なるべく、お金になるアルバイトはないかみたいなことを」

と、ゆきは、いう。

「その時、彼女は、何かを恐れているとか、誰かに、脅^{おど}されているといった感じは、ありませんでしたか？」

「ありませんでした」

ゆきは、堅い表情で、いった。言葉遣いもかたい。

「確か、一ヶ月ほど前に、彼女と、二人で、伊豆へ行きましたね？　そして、旧天城トンネルが、爆破されるのを、目撃したんですね？　新聞にも、あなた方の名前が出ているのを、見ましたよ」

と、十津川は、いった。

「ええ。見たんです。びっくりしました。そのことと、今度のことが、何か関係があるんですか？」

今度は、ゆきの方が、十津川に、きいた。

「それは、まだ、わかりません。あのあと、彼女と、そのことについて、話し合ったことは、ありますか？」

と、十津川が、きいた。

「ええ。時々」

「どんな話をしたんですか？」

「なぜ、あんなバカなことをしたのか、あたしも、彼女も、不思議だったんです。何のトクにもなりませんものね」

と、ゆきは、いった。

「彼女は、犯人らしい男を見たんですね？」

「ええ。でも、あたしは、見てないから、彼女の見た人が、果して、犯人かどうか、わかりませんわ」

「彼女がいったのは、三十歳ぐらいの男で、背は一七〇センチくらい、赤っぽいハーフコートを着ていたということなんです。これは、例のトンネルが、爆破された直後に、彼女が証言しているんです」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。